

彙報

二〇二三年度後期東洋学講座講演要旨

〔中国王朝の儀礼・祭祀〕

——始皇帝から大清皇帝まで——

第五九二回 九月二七日（水）

始皇帝の社稷と宗廟

東洋文庫研究員 鶴間 和幸
学習院大学名誉教授

①社稷と戦争

説客酈食其は秦が諸侯の社稷を侵伐して六国の子孫を滅したと回顧した。戦国六国にはそれぞれの社稷があり、秦はそれを破壊した。社稷には周の天子の社稷と、周王に封ぜられた諸侯の社稷があつた。社は土地神、稷は穀物神、国の象徴となつた。孟子は君主の生死にかかわらず社稷が壊されれば国は滅び、国が滅びれば戦争は終わり、民衆は安泰であると述べた。前二五六年東周最後の王が亡くなつた。前二五四年、周の民は東に逃亡し、周王朝の九鼎の宝器は秦の昭王のもとに渡り、周は滅亡した。周王の子孫は残されたが、周という国は滅んだ。周の天子の社稷と宗廟

は九鼎に象徴されていた。秦の昭王は周の天子の社稷と宗廟を壊し、そのうえで九鼎を入手したのである。

②天子と諸侯の社稷

周王の天子の社稷が失われると、残された諸侯の社稷同士の戦いが始まつた。天子は南面して政治を行い、社稷は天子の右（西）、宗廟は左（東）に配置する。天子の社稷は広さ五丈、諸侯の社稷はその半分とする。天子の社稷は、東方は青色、南方は赤色、西方は白色、北方は黒色、上を黄土で覆う。社には土地に応じた木を植える。太社（天子の社稷）には松、東社には柏（針葉樹のコノテガシワ）、南社は梓（キササゲ）、西社には栗、北社には槐だけを植える。天子の社稷が失われ、諸侯の社稷も淘汰され、統一されると秦の社稷だけが残された。秦の諸侯の古い社稷は始皇帝亡き後に壊され、新たに天子の松の黄土の社稷が作られたのではないかと推測している。

③社稷の形

漢王二（前二〇五）年、秦の社稷を除いて更めて漢の社稷を立てる命令が下された。中国古代の人々は自国の社稷がどのような形をしているのかは目にしてはいるはずである。社稷は都だけでなく、全国に作られ、民衆の目に触れることに意味があつた。社稷は立てるものであり、壊されるものであつた。後漢の『独断』によれば、天子（皇帝）の社

稷は土壇で広き五丈四方、社と稷の二神は堂（建物）を同じくして壇を別にしていう。社は五土の総神、稷は五穀の長の稷を代表とした。

④清の太社太稷

実際の社稷壇は北京の中山公園内に見ることがができる。

清朝の紫禁城にある太社と太稷は方形の基壇を上下五層に重ねたものであるが、明代初頭までは左右に社神と稷神が並んでいた。南京から北京に遷都した明の第三代永楽帝のときに改められた。中国古代の横に並ぶ社稷壇が上下に重なる社稷壇の形式に変わったのである。上の社神は五土を中央の黄色、東に青、西に白、南に赤、北に黒の土壌で表現した。戦国時代の社稷は社神壇と稷神壇を横に並べたものであった。『大清会典』によれば、稷主は木で作られ、祭祀のときに壇上に社主と稷主を西と東に置いた。皇帝は香が焚かれるなか壇上の神位に向かって三跪九叩頭し、爵の酒を口にする。こうした具体的な社稷の祭祀の姿は、大変参考になる。

⑤秦王と皇帝の二つの社稷

竹簡書『趙正書』には、社稷の文字が五回出てくる。秦王（始皇帝）の死と胡亥（二世皇帝）の即位のなかで、社稷は重要であった。秦王（始皇帝）の子の胡亥が即位したときに、父秦王の宗族を夷（こわ）し、その社稷を壊し、

その律令や古き世の珍藏品を燬いたという。末子の胡亥が父の皇帝位を継ぎながら、始皇帝の社稷を壊し、始皇帝の律令（法律）を燬くということは初めての記事である。二世皇帝は戦国以来の秦王の古い社稷を壊し、新たに亡き始皇帝のために天子の社稷を立てようとした。

⑥宗廟と戦争

秦王が頼りにした宗廟は、歴代秦公と秦王の位牌を置いて祭祀する場所であり、古都雍城と咸陽に分散して置かれていた。雍城から櫟陽、咸陽に遷都してからの宗廟はそれぞれの陵墓にも置かれていた。統一した秦にふさわしい唯一の社稷と宗廟はまだ作られていなかったと思う。社稷も雍城にそのまま残されていた。渭水北岸の咸陽が手狭になり、渭水南岸に拡張整備されていくなかで皇帝にふさわしい天子の社稷宗廟が整備されていく。戦争では敵国の重要な心臓部の施設の破壊はつきものであった。

秦の諸侯の五廟の制度は、襄公が周王に封ぜられて以来、雍城内の宗廟では守られ続けてきた。襄公の位牌の廟堂を中心に、左右に二人ずつの位牌の廟堂を選択するためには、余分な位牌を廃棄する。宗廟では余分な位牌を破棄する作業が必要である。始皇帝の死の直後、天子七廟、諸侯五廟、大夫三廟の古制にしたがつて諸侯五廟から天子七廟の制度に改めた帝の廟を極廟として中心に置き、左右に三廟ずつ

六つ並べるものである。雍城内の諸侯五廟の宗廟に換えて、咸陽には天子七廟の宗廟を新たに作った。

第五九三回 一〇月一日(水)

清代外交使節の謁見儀礼——叩頭と国書——

東洋文庫 研究員 柳澤 明
早稲田大学文学部学術院教授

清朝時代に來訪した外国使節が、皇帝に謁見する際に「三跪九叩」を義務づけられたことは、よく知られている。しかし、そもそもこの儀礼は中国王朝の伝統といえるのだろうか？

この問題については、夙に矢野仁一氏が精緻な考証を加えている。それによれば、明代には、各種史料に「跪」、「俯伏」、「五拜」、「四拜」などの語は見えるが、「三跪九叩」と明記されている例はなく、一方で、元代の謁見儀礼には「三叩」の実例があるという。

三という数を基礎とする觀念が果たしてモンゴル起源で、モンゴルからジュシエン(女真)へ繼承されたものかどうか、検証することは難しいが、後金→清の建国期には、確

かに三を基礎とする叩頭礼が見られる。たとえば、ヌルハチが天命元(一六一六)年に即位式を行った際には、天に対する三叩、臣下たちのヌルハチに対する三叩が行われている。また、大清という国号が定められた崇徳元(一六三六)年には、天と皇帝に対する三跪九叩、親王・郡王に対する二跪六叩などの儀礼が体系化された。

清代外国使節の謁見儀礼を具体的にみると、百官が皇帝を拜する大朝(元旦・万寿節など)への参列、単独での謁見など、種々のケースがあるが、いずれにせよ、外国使節は宮門内の中庭(丹墀)の西側で三跪九叩を行う決まりであった。西洋諸国からの使節の場合も、時々には多少の変化はあったかもしれないが、基本的にはこの定例に準じたことと見られる。乾隆年間の作といわれる《万国来朝図》は、西洋を含む各国からの使節が謁見のために集合し、皇帝出座を待っている場面を描いている。実景とは考えられず、三跪九叩自体の描写もないが、天下に君臨する皇帝と諸外国との関係性を端的に表現したものとさえよう。

では、清朝使節が外国に派遣された場合の儀礼はどのようなものだったか。朝鮮や琉球に冊封使が送られる場合、基本的には、朝鮮国王・琉球国王の側が、皇帝から国王に授与される冊書に対して三跪九叩を行うことになっていた。康熙二十二(一六八三)年に冊封使として琉球に赴いた汪